

此後
金銀
銅鐵
錫鉛

松
田
五
山
書
庫

松下竜一

此石に拠る

砦に拠る

©松下竜一
一九七七

一九七七年七月二〇日第一刷発行

著者 松下竜一

発行者 井上達三

印刷 暁印
製本 矢嶋製本

発行所 筑摩書房

東京神田小川町二ノ八
振替東京六一四一二三
電話東京二九一七六五一

目次

蜂起の章	五
築城の章	六
勝関の章	二五
争訟の章	一六
落城の章	三五
王国の章	二七

岩に
抛る

蜂起の章

一 涸れた湖底

わたしん名前でございますか。

ヨシと申します。ええ、片仮名ですたい。そうばってん、ずうつと芳子で通してきたつです。芳し
いと書くですたい。さあ、別に理由ぢやないですたい。なんとなし、それん方が好きぢやもんで。
こん秋が来ると、満の六十八になるですたい。主人の知幸ともゆきがのうなつてからでん、もう丸つと五年
が経つですもんね。ほんなこつ、歳月の経つとは早えち思うですたい。

ええ、今でんが、あんダム反対闘争んこつを聴かせてくれちゅうておみえになる方が、時にはお
ますばってん、わたしやほとんどのあんも答えられんとです。そういうたふうですき、なんかわたし
がわざつと隠してしゃべらんこつ受け取るお方もあるらしゅうございまして、わたしも随分とつろ
うございしますが、ほんなこつもうわたしにや答えられんこつが多うございしますたい。

それでん、お前ん主人の室原知幸むろはらん闘いじやたらうちいわるれば、そらあもうそうにや違わんと
ですけん、わたしやたでもう知幸ん陰でいうが通り動いちゃったけんおなごでございましたもん。
あん永い闘争ん歳月、何がどげえしてどうなつちよるちゅうよな説明は、主人からはひとこつも聞か
ざつたつです。そげな馬鹿んこつがち思わるでしようが、これはもう室原知幸ちゅう男を知らんお
方にや、分つてもらえんこつかもしれせんですね。

なんさま、大変な闘いじゃありました。どしこつらい思いをして過ごしましたかは、もういい果てんですたい。なんしろ相手は国家であるでしょうが、国家の力ちゅうもんは底が知れんおそろしいもんですたい。知幸がなんぼ強い男ちゅうたち、かのう筈はないとですもん。とうとう、それで命を縮めたつです。わたしん生涯も、もうあれで終ったちゅう気がしますたい。

考えちみりゃあ、わたしん生涯には甘い女の生活とかなんとかは丸きりなかったつです。八人の子を育てることと、知幸ちゅうむつかし男に仕えることと、最後にこりから息をつこうち思うちよりましたらまあ、思いもよらん国家を相手のダム反対闘争でございましたら。

ええ、ええ、八人の子を産んだつです。それも六番目がようよおとっこんはかは、みんなおなんこですたい。まあ今思うてん、八人はずの子を、よう、どげえしてふとらせちさんじやったろうかちですな、自分でん不思議な気がしますばい。なんかこう、おしめばっかり洗いやった気がしますばい。うちにゃ裏山から清水を樋で引いちゃいましたが、ほんのショボショボ小舟に落ちよるくらいなもんで、とてんすぎ洗濯にゃとれるはずはないとですもん、毎日津江川に行くですたい。ずうと坂をくだって、降りた直ぐんあたりは水苔がついちゃりますもんね、やっぱあちよと中の瀬まで入っていかんやならんとです。大きなしょうけを抱えち、いかな日でんいっぺんな行かんならんとですたい。子供を下痢させでんしゆうもんなら、もう一日中津江川通いですたい。

そらあまあ下働きんおなごしも居ましたばってん、なんさま大世帯でございましょうが、父の新夫婦に、知幸ん直ぐ弟の知彦の方が先に結婚して子供もおりましたし、他にも腹違いの妹や弟も居ましたもんね。ええ、知幸ん母は若うしてのうなつて、あとよりは知幸とたったひとつ違いん若い人でしたき、ま、複雑な大世帯じゃあつたですたい。そげなふうですき、なんかなんまで自分でせにゃならんとでしたね。

世間じゃ、山林地主ちや、やれ何億の分限者ちゅうて、さぞ贅沢な生活じゃろうち思うごつござい

ますばってん、とんでもないですよ。よそさまは知らず、わたしは贅沢のぜの字もない毎日でございますたばい。昭和八年から一日欠かさん家計簿が、なによりん証拠ですたい。ちょっと読みあげてみましょうか。——昭和八年九月二日、菓子四十五錢、イカ十錢、ダンゴ六錢、送料八錢、胃薬十一円二十五錢、梨三個十錢、控帳六錢。九月七日、ナフタリン五錢、ひびき十錢、玉子六つ二十一錢、オデン三錢、煎餅五錢。ざっと、こげなふうでしたもんね。

だいいち、わたしには室原家ん山林がどしこあって、どんくらしいの資産ちゃ生涯知らざったです。知幸はそげな話はひとこつもせんし、わたしも自分に關係ないち思うちよりましたもん。最初ん頃は、毎日ん入費もいちいち主人が払いよったほどですよ。わたしが月々どんくらしいと目標を定めて貰うようになったんは、子供達が小国^{こくに}ん中学校に入る頃からですね。それも、貰う時もなかなか文句が多^{おほ}うして、どおしてわたしたち貰うことんじよう考えちよって、取るちゆうこたあ一錢もしきらんとか、わたしたち金ん値打ちも分らんとか、お説教を散々聞かされた上で、やっといただいたもんですたい。なんの贅沢がでけましょうか。

ほんともう、何をいわれてもわたしはさからわんですたい。さからえるもんじゃありません。わたしゃ生涯、主人には「はい」とよりほか、いうたこたあなかったような気がしますたい。今考えれば、なんかすこうし馬鹿らしい氣もしますもんね……。

たとえば、「さあ頭つめ」ちゆうて道具持つて来て庭にでんと坐るですよ。そしたらわたしゃ何をしていても「はい」ちゆうて、直ぐつまにゃならんとですたい。主人はなぜか生涯長髪をせざったですもんね、丸坊主でそれがちいっと伸ぶと、さあ痒いとか頭が痛いとかいうちやかましいとです。かぞえてみると、びしゃっと十日目ですたい。なんさま、月に三遍の頭つみですよ。これが、わたしにとっちゃ、なかなかん苦でございましたね。氣をつこうちせんと、バリカンが引っかかち毛を引くですきね、さあ痛いっち怒鳴るつと、こっちはたんだあわてて引くもんじゃき、たんだ毛を引いち、

たんだ怒られにやならんでしょうが。ようやくつみ終ってんが、それでまだ済まんのです。やれ、毛が残っちゃらせんか、われがそんな眼はガラス玉じゃき分らん、鏡を持ってこいちゃうてすね。こっちも心得ちすね。どうせ後ろん方は鏡でんが見れんとすき、それで前ん方だけは特に念入れてすね、後ろは手を抜きよったですたい。

することなすこつ、こげなふうにむつかしい男でしたね。風呂でも、三時頃、日の照るうちに「おれは風呂に入るぞ」ちいわれたら、もう風呂ん窓に南陽の差しよるとに、焚きつけなならんとです。それもどういふもんか、あん激しい気性が熱い湯には入りきりませんたい。ぬるう焚きつけち、そつで入っちゃって、ちよつとぬる過ぎるき焚きつけちゆうですよ。そんな焚きつけが又暇がいると、われがつまでも焚かんき湯ざめしたとかなんとか怒鳴られるもんですき、それでまだ焚かんでいいぞちゆう前から、もうわたしも上手にちよつと焚きつけちよきますたい。風呂ん中からは見えませんき、まだ焚くこたゐいらんぞちいますき、まだ焚きよりませんちいうですたい。そうせんと、間に合いませんもんね。さあ、湯からあがると裸で走り出てくるですたい。ほしてからも、冬なら服を火にあぶっちゃいて、一番下ん肌着から、こんだこれ、こんだこれちゆうて渡してやらな、何着るかは自分で分らん人ですたい。それも、肌着をいきなり出してやっては気にいらんとです。肌着をこうやるごつ持っていかにゃ……後ろが上ですたいね、前が肌着は下になっちゃらな直ぐ首を突っこめんでしようが。そげなふうに渡すですたい。ズボンもバンドを通してちよつて渡さんと怒らるるとです。ばってんあわてちよると、つい反対向きにバンド通したりしますもん、忽ち大目玉ですき、自分でちよつと腰にあてちみたりして、ああこちちがこうちゆうたふうで、ちゃんとしてね。そして、着てしまふと、ああ気色がよかったちゆうちからすね。

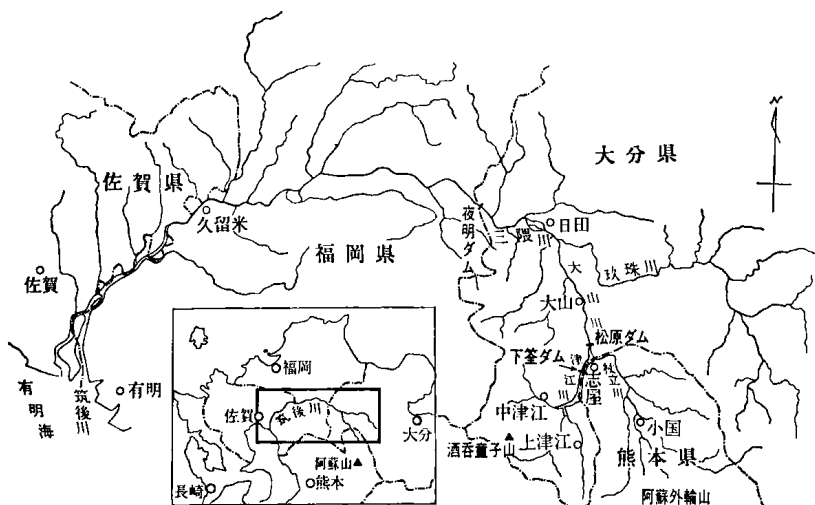
大体、おなごちゆうもんな、家ん仕事をいわるがままにしちよきいいち、そげなふうでしたね。わたしは婦人会の部長になって、ええ、黒淵は六部に分かれちよつて、志屋んへんが第六部で、わた

しが部長ですたい。それで六部全体の部長が集まる会議に行かならんとを、行くこつがあるか、婦人会が何かちゅうて、行くなら行けちいうて叩くですたい。それかちゅうて、行かなわたしん責任が果たせんですし、二里ばかり山を越えて行くとに、なさけのうして泣く泣く行ったこつもございました。

大体、おなごに何が分るかちゅうふうでしたきね。わたしが新聞読んで、今日はこげなこつ書いちゃりましたねちいうと、うんな知ったかぶりすんな、新聞はオモテだけ読んだちゃ分らん、ウラがあるち、こういうようないい方をして叱られましたき、もう、うがったこというてん腹かかるし、まちごうたこついうと、なんの馬鹿らしいこついうかち怒るるでしようが、それで全然なんにもいわれんですたい。普通ん夫婦ん対話なんちゃなかったですもんね。

それでん優しゅうなかったかちいますと、わたしが病気で寝たりすると、つきっ切りで冷やしてくれたり、よう看病をしてくれよったです。いつでしたか、わたしがひどう寝こんで、ひょっとしたらもう助からんかしれんちゅうことがあったですたい。なんかほしいもんなねえかちゅうですき、どげえしてあげなこついましたやら、わたしや岡晴夫人歌が聴きたいちいうたですたい。そしたら日田ん町から蓄音器をかたげちこおて来てくれたつです。今思えば、どうも腹ん中は口ほどじゃなかったようですたい。

確かに暴君じゃったち思いますけんど、やっぱあそん頃は、男ちゃ皆あげなんもんちしか思うちよらざったつです。ま、明治生まれん男ちゅうもんは、自分だけはやっぱこう、けたはずれに上ん方からおんなを見おろすちゅうたふうな、そげなふうにおりたがच्चるふうでしたね。近所ん男んじょうでん、よめさんの話を聞いちみますと、どこでんけっか口やかまじゅうしてすね、氣に入らんとげんこつをかませたりして泣かせよったようです。志屋神社んお祭りやら阿弥陀様ん祭りにゃおんな同士で集まっから鯖んぬたあえで酒のうだりして、男達ん愚痴やら品定めうさを晴らしたもんで



筑後川流域図

すたい。

あれでダムん問題さえ起こらんなら、わたしん一生も、やっぱあどっちかちゅうと、しあわせじやったちいうべきかもしれんち思うとですよ。まさか一生の終り近くに、あげなおおごつに遭おうちゃですねえ……。まあ、これがわたしちいうおなごの享ける運命じやったんでしょね。

知幸んお墓でございますか。ダムんそばにありますたい。そうですか、参ってやっていただけますか。御案内いたしましょう。

筑紫次郎と呼ばれる九州第一の大河筑後川は、阿蘇外輪山に源を発して数多くの支流を合わせつつ成長し、筑後・佐賀両平野の穀倉地帯を緩かに蛇行し潤してゆく。幹線流路一三八キロ、筑紫次郎の旅は熊本・大分・福岡・佐賀四県に跨り、最後は有明海に注いで終る。

阿蘇外輪山の急峻を駆けくだって来た幾つかの支流が合して、漸く緩かに筑後川本流の趣を湛え始めるのは、大分県日田市内に入ったあたりからである。このあたり、三隈川と呼ばれる。

室原ヨシさんが、水没地となる志屋部落を離れて居を構えたのは、三隈川畔の高台であった。彼女に伴われて、かつての志屋部落跡へと向かったのは、一九七五年五月も終り近い日で、もうすっかり初夏の日射しが三隈川の川面を煌めかせていた。

日田市から志屋部落へは、川に沿う道を遡って行く。飯田高原に発した玖珠川が三隈川に注ぐあたりで小淵橋を渡れば、ここからは大山川である。車が日田郡大山町の短い町並みを抜ければ、川に沿う道に迫って緑濃い杉山が続いていく。対岸も杉山である。

二十分程走った頃、最初のダムが見えてくる。松原ダムである。堰堤を渡る国道二一二号線と別れて、更に大山川沿いに県道を遡行すれば、直ぐに貫見の地で大山川は杖立川と津江川に分岐する。私達の車は、大分・熊本の県境をなす津江川沿いに大分県側を遡行し続けたが、このあたりは旧道の水没に替えて山の高みに拓かれた道で、幾つもの隠道を抜けて行く。遙か眼下の湖底には、こちらの岸にも彼岸にもかつての部落台地が点在し始めている。

梅雨に備えて春頃から水位を落とし続けたダムは、今漸く湖底を潤らして、かつての部落跡は水から引き揚げられたばかりの溺死体のように露わとなっている。それらが部落跡だと知れるのは、岸から迫り出した台地に遺る段々畑の痕によってである。離村の日、家々は解体され撤収されたので、しぶとく立ち尽す枯木の他には何も無い荒涼とした台地に、堅固な石垣で区切られた段々畑だけが今もくっきりと遺っている。人々が住家を取り払ったあとの台地というものは、ここに一村があったのかと疑う程に、狭く小さく見える。

水底から露わになったばかりの台地には、まだ幽かな草の芽の萌しもなく、灰色めく濡れ土の色の他にはひと刷毛の生色も目につかぬ。そこがダム湛水時の水位となる一線を境として、それより上の緑濃い山腹と、それより下の生色を喪った土色の湖岸が画然として対照を際立てている。

「むぎいあとかたになつてもうち……いいようのない気持で見るとですもんね」

小さな身体をきつちりと和服に包んだヨシさんは、窓の外を見降ろしながら呟いた。

間もなく、車は下笠ダムに至った。日田市から約二〇キロの距離である。湖底から九八メートルの高さで聳える堰堤を渡れば熊本県となる。渡って直ぐ、津江川沿いに道をややあと戻る最初の隧道が天鶴隧道。それを抜けると直ぐ左手に降りてゆく狭い道がある。かつての志屋部落に降りる道だ。

熊本県阿蘇郡小国町大字黒淵字志屋は、戸数二十一戸の小さな山峡の部落であった。

部落を通り抜けるかつての川沿いの道にまで降りて来ると、その辺り一面を覆って丈高い雑草が立ち枯れている。人が見捨てたあとの部落跡に、ダム放水時の夏の間ほしいままに茂った雑草がやがて湖底に沈んでしろじろと立ち枯れたのであろう。

「ああ、まだ石段だけはそのままですたい」

道から五段の石段を踏んで、ヨシさんはかつての屋敷跡に佇った。さすがに水に強いアヤメが玄関脇のあたりに緑の鋭い葉を立てて紫の花をかかげているのが、この枯れ枯れの廃墟にただ一点鮮烈な彩を添えている。この人からこの場で往時の憶い出を聴きたいばかりに連れだって来て、しかし今ひとつそりと一人の思いに沈んでいる人に、私は言葉を促すことがためらわれた。

志屋は、津江川を前にした山裾の部落で、緩い傾斜に段々に家々が重なり、その前を白っぽい県道が通り抜けていた。その道を挟んで津江川へと落ちる斜面にも、僅かながらの家と多くの段々畑と竹藪や杉木立があった。

屋敷跡から見降ろすと、道の向こうの段々畑が津江川へ落ちる崖縁に、黒々と異様に拗くれて立つ五本の枯木があった。その木の名を問うた時、ヨシさんの声がやっと少し弾んだ。

「ああ、あれはうちん畑の柚子の木ですたい。志屋には柚子ん木がえらいあってですね、皆して搾りよったつです。ほんなこつ、ここはなんでも出来るよかところじゃあったですたい。あんな崖ん斜面じゃ、わたしがこんなにやくを作りよったですたい。こんなにやくは坂へらん所ん方が、どういうもん

か向いちよるとですもんね。だいぶんがつ売れりましたよ」

ぽきぽきと枯茎を折り分け踏みしだいてその崖鼻まで来た時、ヨシさんはあっと驚きの声を洩らした。

「こげな急な崖じゃなかったですたい。ばってん、ダムん水に土を抉り取られたつでしょうか」

見降ろせば、崖の土は削げたように崩落し尽して、この急斜面を降りることなど出来そうもない。

今、眼下の涸れた湖底にやっとかつての津江川の流れば蘇り、あるところ激しく白水沫を立てて瀬の岩を噛み、あるところ碧潭の色を濃く深めている。一年のうち短い夏だけしか湖底に蘇らぬ溪流であつてみれば、もう河鹿の鳴くこともないのであろうか。

「あの道にかぶさるごつして、一本出っぱつた杉ん木があることでしょうが、あん下んへんが穴井貞義さん方のあつた所で、あそこで部落はおしまいですたい」

ヨシさんの指呼する方に振り向けば、志屋部落の背の杉山は蒼黒い程の厚い緑に鎮もり、今更のよりに鶯の声に気付く。

あそこでおしまいとヨシさんはいったが、むしろ志屋部落はそこから始まるという直した方がいい。部落で唯一軒のよろず屋を営み、その店の前がバス停でもあつた穴井貞義方が志屋部落の入口で、部落の終りはダム堰堤寄りの方の高台にあつた志屋小学校であらう。その小学校の下を過ぎて一キロ程行けば、やがて道は大きな崖に遮られて行き詰まり、そこから蜂の巣橋で津江川を斜めに越えて大分県中津江村に移るのだった。そのあたり、今はもう聳え立つダム堰堤に塗りこめられて面影もない。

今、ヨシさんに導かれて私はかつて学校のあつた高台の下を過ぎ、蜂の巣橋の方へ行く県道から折れて、背後の山から津江川へ注ぎ落ちる溪流天鶴川に沿う部落はずれの道を山の方へと登って行く。この道の途中に、故・室原知幸氏の墓所がある。

茶の木の間で囲われた広い敷地は、墓所というよりは園と呼ぶにふさわしく、ツツジの花に彩られ